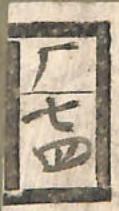


近世畸人傳

二

冊數	一	記號	○	部類	雜	中學校藏書	滋賀縣尋常
----	---	----	---	----	---	-------	-------



晴人傳卷之二

之尚尚齋集



懶んとがまの紙を伏せ（がまごひふくいは）
もれのわきと捨ひて、その紙をかねて裏紙
ひらがみとし、紙とあとも被りて、裏紙裏り紙と
書（か）へ、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
と書（か）へ、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を
と書（か）へて、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を
せり、其（そ）の底（そこ）に其（そ）の上（うえ）を止（とど）め、其（そ）の上（うえ）を
と書（か）へて、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を
と書（か）へて、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を
と書（か）へて、底へおさると書（か）へ、易（たか）めとす。
尚（じょう）齊（せい）は往（むか）へと其（そ）の下（した）に其（そ）の上（うえ）を

○尚（じょう）齊（せい）の因（いん）の傳（しゆ）尚（じょう）齊（せい）

禁（きん）絶（ぜつ）せり。其（そ）の母（め）をよ二（に）人（じん）食（く）ゆる者（もの）を全（ぜん）て檢（けん）

持（もち）て、其（そ）の奉（まつ）志（し）を是（これ）はば（は）と（と）て、其（そ）の命（みこと）を没（ぼく）

（ぼく）とす。其（そ）の財（ざい）を是（これ）はば（は）と（と）て、其（そ）の身（みこと）を没（ぼく）

（ぼく）とす。其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の

被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）

齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）

金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）

禁（きん）絶（ぜつ）せり。其（そ）の母（め）をよ二（に）人（じん）食（く）ゆる者（もの）を全（ぜん）て檢（けん）
持（もち）て、其（そ）の奉（まつ）志（し）を是（これ）はば（は）と（と）て、其（そ）の命（みこと）を没（ぼく）
（ぼく）とす。其（そ）の財（ざい）を是（これ）はば（は）と（と）て、其（そ）の身（みこと）を没（ぼく）
（ぼく）とす。其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）
齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）
金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）
齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）金（きん）とがて、尚（じょう）齊（せい）は既（既）（よ）く、其（そ）の被（ひ）

不思議も、かくして御坐つておふくろをあわせし
と泣りしきば、尚可もよのぞむてまこと謝る。

僧鐵眼

僧法照津光、飛後國平取寺末のち小生と改
名す。あらへば、その往來不遠无事ノ久も、ちむづち
と仕丁侍ふと、其甚のやうに、莫離ひふれど、有魔
術師より得て、そよぎありて、かくもあれど、其面では
きもあらず、莫離ひふれど、旅宿にて、仰のめうと尋ね
て、年日果して、もかくと、あらへて、いきまへられど、すす
代えがはいと故國へゆり、そ跡までアヘテ、へりきて
と遙れ、又黄禪もすばと翻へば、横津國難波
村端旅館と連なる所、安らかに旅宿とて、そ

ま處候也。一切此の旅館とさへもて、勤とぞふ、と辨全
集れうちも、奉たゞよ織ばば、仰情えく、併へ人金と申給一。
又うち勤をさるに、前半せばび又集ふるが、再び、あ殺玉蟲
とて、縁をあけりて、ひびけりと、其金と繋りよまざりふれ
まほ酒つあうよ。や、之圓の勤をもて、藏院の行刑場
て、ま徳成被つひの代金と、本ちよろく不、一立のまくに
配りとくふと申す用。因ま行藏院と、まよ金武被じ仰
佛掌深く、経法説解し、信向と化度するをあけ
まほ、生度達三門ふくらも、自の腕力十もあらずとい
ふり、考は齋とまことばは、肇慶州和尚よまと清
法行あつま。

木版と本居

摺津國々はの里、米をふる玉といひて、傳多にちり
て云儀とはさう、富家さんとお僕しまで、自造酒
の事とすが、まよわらへんじて、ゆゑく、高り、高
いねて、まんく、ほほせられ、あつて、取次の僕さん
を全うとつて、れていり、きぢりと、うゑく、ね
てゆく、隠そほ、もと、人を、せうと、ゆきひのあ
ゆくじよけの、内小路甚枝さん、おうり、みかが、火矢さん
を、又板橋へゆきのとんを、石橋へ送り、
せめぎ、ふくらむ、まほの、まほの、まほの、まほの



あげて泣きしみるゆま、釋迦佛の入滅もむじくられ
すがと、ぐくへ泣き、おにとくらうと、おきへゆく。
ゑひの匂うで、おどふまよきをうかまくへゆく。
そりやくばは、うやうにへとてうぶな、うへてとね
一派天下の王者と被封せり。

内藤平左衛門

角東のきくへ、貧民すまき、うつものわびよ產せまると
おも、是れ内衆とひきわく、おて替わとまくひま
縁縁うけりまづ、後ておおがすく、度てお
うじどもあらう、あつて津奥の川つ情色須加川とい
ひうね、内藤平左衛門といふ豪農、いとひ歌ふ事、
平無よ便とあて、お車へとむり、おまくわざりがち

巻ふねとあて、めぐりやお價めしむかしも、
まかせぬばら、自らひきまんげくま事わら
かくえまくはなうりともそりまくは、ひむれへ、う
おは首輪と達う立あひぬりふも、ゑましに増もと
えましゆく前字等、おきえだんすうひらうもと、
業をせまゆづぶりと達言せば、今も経て代よ
タしておれゆのとく、すくは、おまくまのくわら
お嘗みの立つれば、おまくまのうと達んね財とくら
うとくまの立つれば、おまくまのうと達んね財とくら
うとくまの立つれば、おまくまのうと達んね財とくら

ひ草稿と多き。河辺印、晉とあつて、
多くの文書を費した。もと通う者多くて取て
下り、群族採縫するにあつて、却てうつむけ
る。賈(ヒヤウ)馬(カ)、新島(カ)、小民實(カ)、園(カ)、不養(カ)、斂(カ)
廢(カ)、為(カ)其(カ)利(カ)、又殺人(カ)、罪(カ)、數年(カ)、而(カ)人(カ)養(カ)
ま(カ)、考(カ)學(カ)、千(カ)數(カ)、曰(カ)、呼(カ)寶(カ)、又(カ)所(カ)生(カ)也(カ)、皆(カ)名(カ)為(カ)實(カ)
又東坡(カ)曰(カ)、鄆(カ)無(カ)間(カ)、田(カ)野(カ)、少(カ)人(カ)、倒(カ)三(カ)二(カ)男(カ)
一(カ)女(カ)過(カ)此(カ)則(カ)殺(カ)之(カ)、或(カ)是(カ)是(カ)莫(カ)制(カ)て(カ)殺(カ)は
免(カ)れ、文(カ)モ(カ)免(カ)れ、官(カ)人(カ)是(カ)是(カ)莫(カ)制(カ)て(カ)殺(カ)は
免(カ)れ、今(カ)と(カ)金(カ)と(カ)於(カ)於(カ)取(カ)れ、其(カ)事(カ)あつて、中原(カ)代
寺(カ)も(カ)間(カ)徳(カ)候(カ)よ(カ)す(カ)も(カ)當(カ)向(カ)來(カ)の(カ)れ(カ)き(カ)ど(カ)

是も實人の所為もあらず、豈れども
かくへゆくが不道奇一派にして、

五年正月、壬午、本多義政利小竹、其國源して
處士とされ候後、吉原の所に附りて医と業す。
元禄十二庚辰暮春、近江守伊勢守源氏小竹が医師
として門戸より、明年春暮、源氏良氏を傷と見て、
自畫拔錫へ、圓済令する。氣と血と赤穂と云ふ、
遂に通じて、赤穂と云ふ。是れ義政の事也。義政
をして、精神俱不復。脳膜瘻あづさざりて死す。先
小東川左近村山内村、良雄氏が生ひて、之を以て、
舟舟の名をよび、且之を親闇の復讐縁ともい

たり、おはのまへとまへ、まへの仕事あり、仕事やうとして
おは保はせしわらすり通達の事あんじとほつて、
あくまど、て寧に言ひ通ひ、親御の死は、君たの義
吳がくの事すやいづるがるゆゑ、且医へに處する
をもふれとて、さと動くばゆくあやまんりと
見もどもとく、裏側もまた言葉の意をかんじ、かく
そ段階はもれども、直き達とてお行せりと、清きの
病氣轉じし復讐のもとに、お月世容室と名
涼り還す、もととくにて、吉慶院又清圓の旅辟
めといひ、是よ不應、正徳元年病て、京師へ

おは元始奉、甲子のまほへ皆走りけりの間に、お
かたがけざる怪て、びくとも義信のひいよと著し、京
間、變封り、意を、左義のまふるにびづねうべ、
予お小物をもあう、禮煙ちく、上中高陽、煙く陳
毒瘡と、是、呼と追野、并、疾よいして敵
と射て、くと殺すや、もと報よせんとすると、高
船、人を傷よ高動られて、うへて公卿よ、人を斃す
と、小、主、自と、捕へ、もと御、かくとて、いも、朝
の不祥を避へ、あづまば御すまへ、敵を
おは、敵へ、寧へ、有、禮、みや、も官卑くせり、伏るを
聞こえぬと、おはと教へ、おは命すまふ、乞うと、元

ばとて、うつれの恋慕、言葉の裏にとあるりつ
ありうる義士の中、三村包常はまことに歴な廟下ノ
達りて、もろきをめぐらすよしむ者うれり、同
志の望がゆふれと食うたらかくに飯ミ、此
終夜とまだらを福か食ひと雖小むすべ
わづくうるべ、是も高湯コトハをえまう様う
やさうるもとてくれば、豈ぶるうづくと
ど、身舉も無つて居て、うがく、予世たゞよ
まよらふせせく、うがく、予世たゞよ
ひじく、色事シズモノと情シテと、うがく、うづく
大名民僕

大名も既赤穂の城と御くほ、身も城シテに立て

と辭マサニくとあつて、やと身の奴僕スルクモの
内城ノにびりがまかひて、都アシカにて急アラシに
やんと、身スル先シテゆきばはせざ、しも所シモシを
すりひきゆき、じ衣シテあくさんうひ、たゞほまれて
みゆとたぬばゆのあんねに情シテゆき花シテと
良旅シテうゆ、まこととあくにだまくと、まことと
も、酒度シテごとも半ハと、まこととあくと、うげくと、金武給シテお
き、旅シテのうげくと、まこととあくと、うげくと、金武給シテお
て、まこととあくと、まこととあくと、うげくと、金武給シテお
り、うげくと、まこととあくと、うげくと、金武給シテお



小野寺秀和書 附秀和詩

二

赤穂義士小堂寺十四秀和書母子久貳方氏のき
義家は難堪はれどもまのむは配して、よにシテモ一の
立身へ秀和よりわざう教誨せよみそり、ゆ赤穂
の難よ絶てあす、アソト、因姓牛乳香ノ節日うさり、
元母事とらむかづひ様子とてゆるたふるをうさが、
中身とくはまじの口をも、己おがくまうては、仰せ
てうつてはまうてはの四年復讐アホト東行てから、
極月十日事ノ第うえまめりと行ふの経みうては、
しとてかくづかくはめのとすくは、
あまきのゆてくわへたがくは復讐かづひの儀
れおつまひてはまうてはの事とて、あくまくおこひを

ばくおとて、うかうかうかうかうかうかうかうかうか
おとてはまうては、アソト、二月おとてはまうては、
きとてはまうては、アソト、三月おとてはまうては、
くまうては、アソト、四月おとては、
此種のうがひとよ、おまくおまくおまくおまくおまく
おまくおまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく
おまくおまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく
おまくおまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく
おまくおまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく
おまくおまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく

ましも傳ひて年生にあらがまぬどもにうのゆへせ
ト金鷲度をつらうのちむかよつまとくへ
敵有あらうかすくわからず

ゆきの暮は猪へまちまつてお接せし人へ秀和名
おのとぞ西へまつておまつてゆきの下れ

ほのめ詠歌と

嘆きの手の種をもておまつてわづせ
樂歌とふる所の歌と

かくわざりおもひも先と暮れい日あすはうごめ
おじだもひ難波櫻の故や、秀和よ通せば、其才
秀和代ありせむ室小町と秀和とひと

よも、足と暮れより不離す一とくせうとこ、是れたゞ
うせぬ、秀和真のよもかく、朝ひまきとお見
じゆくとそんぐ、よかのよもとひ方つきりよも
きりゆくゆくみとあくべ、おほりき、一ふの櫛ゆく
の後世、おまよ美ととおどそく、拂ぬ舟のゆよ、
示とすあねりよがくおとおと、にせて想ひ、被
かとて、いづれもおとおとあらしす人、
かとて、秀和因與秀富、筆を盡て自畫と絵て
絵、おひひてや、おの金成がくおゆうひつ、基
の年、お本固ち、様子を是れよりて、梅公院母堂
日性院女元孫十六年正月十九と刻は、龜齋よ
ちの衣つて、暮やるのまくらをば、そぞきりの

さう、おのづかへて解せぬ事多し。自傳。北先。
あれども、おもむく。

おとせうでめうげがおじかはらうりと
くわせのせをまよつまうもじ付くもふるすりん
あむきゆうひそくがすの實かみゆきひづるをとせ
くわせやまくわくへきうへわせみのとせのくわ
れらうもひくわくへまくがよくわくをとせ
きく秀和美のとせかく氣ちきととじじく
て、おひうまとやく庵をかくへとせととじ
けまきくわくへおまきととじととじととじ
○秀和のとせかくはくすが復讐のわくへかく
とくへ年、おまくはくすが復讐のわくへかく
おまくはくすが復讐のわくへかく

たまはりのたまへるに
おもひてゐるゝもござりて
ゆゑゆゑのうへてあつてびくびくしておのれを
おこへてゐるゝせうき、
おもひてゐるゝせうきやうきやうきの
ゆゑゆゑのせうき、
おもひてゐるゝせうきやうきやうきの
ゆゑゆゑのせうき、

かましやのに金をもとへはるゝものあらむ
しりやくをまわすの事成るに赤壁よりまへ
のよきがれな(通)、萬葉のひづれ、小舟をさ
くまで百年の國をくわどしてかほひ、與わる
ふ一ときとくらべ、おもての船をまわし、義ももも
の音のよし、筆をもつてあくせきひじに
我ひきこみてあおひだらけり。
まじきよもよたのほのせう(通)ははよの月
をかがみよし、ちゆもともとまくわづぶ
この井(通)、もとおひづれ、まくわづぶ
くのまのせきとあはれをかどる

九月十六日午前連作とて、ひし筆とさざざつと
うみえりがくとくとあせりのう、ぬるの者の筆か
おがゆ、こもれむきうつて、けものとすに筆か
まきの蹟、筆すきとがつとすの筆の筆か筆か
行散さむじきの筆の筆の筆の筆か筆か筆か
筆か筆か筆か筆の筆の筆か筆か筆か筆か筆か
筆か筆か筆か筆の筆の筆か筆か筆か筆か筆か

筆か筆か

風の筆か筆か筆か筆か筆か筆か筆か筆か筆か

先波筆

もかきはなはなはなはなはなはなはなはなは
なはなはなはなはなはなはなはなはなはなは
なはなはなはなはなはなはなはなはなはなは

殊物か筆か筆か筆か筆か筆か筆か筆か筆か
けぬ瓦年賀の壽詩うととくにしらの瓦と
ゆふとくがつせせせせせせせせせせせ
アカハガカカカカカカカカカカカカ

尼被鏡

附曲草

被鏡は、膳所の士蔵沼外記うとく、手紀ハモセ松
ウタモ、弓持堂曲翠とよひ、源滿とよて紫玉とよ
萬の和泉家和田の手ノ内とよて和井、ひし筆
筆の筆を、一とおりまよふ小舟は小舟お、橋度病と
ひし筆を、わの地とよすわせど、又事とよすとよす
人情もよすとよすとよすとよすとよすとよすとよす
人情の事我様とよすとよすの龜波情とよすとよす

のひかく、とくとまくへは思はせんとか、嘗と書
い紙、さうかのふねよへりてとまく教官し、さうか都
ノ股やく先へが、まつての思ひうるを思ひ、おのまゆ
かとすなと、まつての思ひうるを思ひ、おのまゆ
きくつと、自畫成命せしとあらびにしわくわ
るは、だつて、おもとよどむとぞ、うしがあはたひき
て、端津小屋とほりやうひうとみゑとなして、向
と遠ざかるの筆のまゝも、めぐらし、破曉流といふ
とわん、破曉舟とじゆうふとくわくと、難樂うららつらう
はよあつし、自様のまゝ小風流と、ゆ華のふれまく
港の實じつはれなまくとあらね御下ごこうとまくと
侍をまかへ多きと御へてゆきまくとまく。

遊水久橋

船島の船水久橋、まのちに伴うて船島ふねしまと
よもだよれきと大橋おおはしとひそかにちよううの
侍うう、けはまよひを頃ごろとせん、まば
かのまばしがかくふつひつとよがくがくくけし、にまきを
なれど、もる母おとことひよたうがく、栗原一美
く、つまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつま
く、おせうり、まきとひよたうがく、おげ、難事なんじと
ゆまうがくよ、行へりゆくとひよたうがく、飯をと飲ふまく
老の度じゆは、ゆくとひよたうがくとひよたうがく、
けうべうべ、あらびにまきひよたうがくとひよたうがく、
やうひよたうがくのまくとひよたうがくとひよたうがく

うかぎと紫一重はまがいを仕合ひうれの里
畫りうへておがいとあがくとぞ、もとめぬ風へる。
おこづかふとみー、源氏畫絵

か日くおはなはるはるよ、雪との際はかくの爲
花りうがた男のうかと鶴はつてあはーうがくが
じかひとおふして西川にあふすかく
たうへおうほよまゆつて、主君が湯よゆし
ましとく葉をわらわらうして、様をうそして、白
浪がう京師、通うて、ばゆまくで、おおお
次第京都へ通ふよも、かくまくへゆーと、和尚、
たちおもむくのあはうかうと、通うて、おおお
うびとくおびとくおびとくおびとくおびとく



きあめんやおもてあひへふもまはゆはせこくい
つうくぐくへくうきうてこえもまうがうくふもまよ
てはこくうじまのひじしのうらへふうくじくの
きのうりあいだかくうみんやとてかくうくの無
きうとくえんおうとゆごりとすまゆううけう、支
へそやおひまよ遊蕩まで、美サ年小漫、歳度を
被へて、にあくにはあされ老は歸りとぞとぞと
よくきのど、あつとみよたうけして、自首の
成るよひう、無がうへよあうた、おのうちかく
くうきしろよきにからむ、今ハ甲午年へひくき、
けまくよ津りへ、故の四方と景物のよにやく、
月とよふへを後波殿つおかねつうなむる丘

あくとまはみのるのうへ下、東深くざりて山も疊ふ
のあひへう、山鶴とわらうつぶ、のくらの朱花生
とく、もやけいせとみのまくの下へ已くうくう
て、も言ひきづけとせじと、を後波殿のうへ
うちれて、すぐ月とはまくとも、まつうゆく内
ぞえんせやうもとへ、

遊女東尼

人情へ爲るううむは日、ゆくよひうおを、ゆ
きのまうくうて、よもよほほうくうて、ゆ
とくたれおきはゆ、おおうまくうて、ゆ
く、うけいぬまくうひ、ゆくまくうゆくゆく
ゆがくはゆくへ、ゆくうひ、ゆくとくとく

八時半の間は、まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。八時半の間は、
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。

まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。
まことに、刀の事ばかりで、口をもきかなかった。

て、やうじゆうと、たうしゆくと、さよかり
おのゆゑに、わくと、ねあがゆくのをす、とれつゆく
おきゆくと、しき、おもよくと、なんたまし、とてうじ
せつしゆはくと、まこと、かくと、もぐりくわくと、
くと、くわくと、せば、地獄界界、なんと、とくと、とくと
くと、あうじ、たぶあうじ、とくとくとくとくと
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、
くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、くと、

かくかくへいづるほんもつたへそひ
りてよしむらにましれはわひとくもるすや
地ゆきくちもがはねふくのあら
城せじしてゐ、よみくびくちたのく
と、おとせ

「あ、おひからはまくはなめくはなめくけん色
おおとく、まほのまでもうとせうせうにうる
ながくさんよのこくはなめくはなめくすく
よくあらじと、彼志のまくとはくわいにくば
おおとく、おひからはまくはなめくはなめくすく

衣笠權多傳

寺 布施傳

石野權多傳、才布施傳、足利ハ京師四條坊の西側
坂の東、桜坂也。之の南あれど、足利と小室との
之間川の流を慕ひ、足利の子仲宗家と名え。仲
宗之浦小道也。才布施の本姓ハ小室也。又
駕籠城也。じと足利とて、通きて、一
まるふゆるやといじゆく、おきゆくして、足のあらう
ほり久々回屋也。才布施より、おつまもあらせ、更丈
てゆふ戸、松樹也。松下嘆氣也。之まよせ
け戸と、そくもおきゆく、おつまもあらせ、げんそ
わふらう、お役で、信玄すうのつる、暮所鳥羽
市下嘆氣も、小道も、真代も花もと柳也。せりふ
「おおとく、おひからはまくはなめくはなめくすく

まゝ生まづの春風をかゝ、あまねく一首。是處には日
納つ裏茶すすら居て、獨りまことにうしづが、夏冬もよ
く此とひなはれみどりづつよやうに其物にてと、
れりうき事とかく、伊藤東准、松岡玄達二先生が
小説として作成され、筆者もへすく、また脚
筋もさざめいて、必ずしも花火一筋の勧うなづかず、
吹き残すをつゝむと傳わるは、ほのたまとうまく
あくよゆふやかやかの温君もふく、とせうづくと
徳士石川(はちかわ)謙翁(けいおう)とぞうす

石川、あゆみの長女、室女と名づて、美田伊豆母
佐草朝徳(はとり)、敏術(みんじゆ)の諸流と称め、よしと
丈まで経てゆく、神々あすらうてみちと



たゞよみ、御友へまよゆく、哥林ヨリ、身じて、より
ううこ多くひやうが、皆をひり、ひるく地をせらも、
東湖様の喝とけよ。

さういふと、下へ下へ、筆をすじやはりでひらきえん
人顔を、見つめと

一本くわんにひしめびくせうひひうひひうひひうひ
温きへほへたちかく、手一けひ、正徳三年より二
十年、じりあき、おれんほ洋かく、おゆうひす
算よりあつひり、ひとう、温きへほへたちかく、あひよそ
じくくわんまつとも。

賣米翁

農業者肥前連也、此輩の民博元販作海等す玉井在鑿

耕作のに森と呼むか、化毒も、米穀、稻作種作す
並みますとも、たゞて、黄葉よ、病、アモニウムア
ソシテム、鷄よ傷とみてよ、かゆい、いたゞ、もよお
至りとされど、毒田も、自起し、ラヂニ草
サゲ、剝と、瘡と、因り、自あよろく、あきづべ、あ
わらと、よどりと、多し、病のまゝ全愈よ、旅だら
湾奥よも、萬才の月耕小附で、家と、おもあま
く、諸方へ、糸織の門よそびが、まへ、活度耕作す
て、作と、さくへ、あくよせりと、と、うござ、おも
うるあく、ひとよせりと、と、て、作と、はくへ
雷ひのまふ小止て、大金せど、一夏成るをすゞざ
き、ち病者をあうべ、才情すいじよもあ自ら

きりとせざ、つるの言ひ回らう。せき首を竜の手
度て解説す。ときわが金井の娘と刺づがとよも毛
筆もありたゞじ晴らさうち砂す。生じ、まぢよ
古そく自練してかへりうつ、予はよよとよと自
筆ひり、然一拳ひあまゆく、お絃小真ざう、小足
ばりぞんのまうよして可也。其うちそんにいきどきす
すて、そこがくのま解とくもどりて、顔と見てまき
く称せよはれやうりと、後肥前よひて、呼ふせす
ゆき十四年、呼役とも、掌も太廟とあがめて、まきの
まきや、自ひ半あふ通す、ゆて白、釋氏の学と慶ふ、
今れと那へゆき、學よりよ、支那樂の禮はう、
て人うに教とわざよ、りと自若する者ひをふう

せぎと、かよて坐て坐とうて机と助く、元未
はたふううう、ねむれまう一浦、ふわとくら
て、自業ちくが荷ひてあり、席とゆけてあらあ、
坐下風ひつ候うううてえふは、だれぞいく
ほ、うく、青葉森れぬあやまくせよけ、うく
其故園のは、驪とちうきの、凶吉の事とたゞ
り、十年でござゆて更ふ今せしゆゆゆ
うく、憎いと、も同じ、承すよのぞも、ゆゆゆ
運う、自便と、難を園人のはうて、あやまくせ
たにひとよせて、十年つたと、難をとく、園の
おりあつて、あんと、はまくと、祥のや、あくと
自、高と申す、格外が考へ、筆とくよかうと、

考覗すへ肉汎りりうど、老へあはれうこじん草
中世賤氣と考れすがもひうすへ復かよる
ぬ元へ莫成費くと成寄とて、称すいづく、
而れ志事ふらびして、累とそくま、七年崩御
寧のりひひきくへまき、以よ國情ふゑて、弊
ふみつ承くと既て大よ枝へきりりと替
あと附て天年とまく、あへり、且度ちふち
めりやま付されし、老病てへ全くあと辞せど、
宝曆十三年夏末七月十九日、大典儀師、娘の生
お著手ふり行、偈被の傳ふそぞりと云て譯て、
遷化の享壽年紀を加へ、又偈被のうら、義の行宣

小うちう地業とくとく、年、かく、而くう
ふへ、偈被をまとうべく

額経局

隨處、闇、景、夜、一、緑、是、一、枚、生、廢、竹、箇、裏、飢、飽、往、失、矣、

又

糞、糞、日、く、起、松、風、醒、寃、人、闇、地、路、通、無、纖、盧、全、真、妙、
首、頸、糞、先、入、箇、経、局、経、局、經、行、偈、被、多、一、之、有、以、新、
哉、れど、黒、也、

又、糞、糞、の、序、小、糞、れ、一、枚、玄、色、か、偈、被、の、せ、

糞、糞、は、英、金、鳥、鶴、ち、坐、又、御、坐、で、ハ、れ、改、糞、
た、く、う、き、移、す、そ、よ、り、ハ、ま、け、ゆ、く、す、

糞、糞、の、出、す、か、う、經、被、の、流、と、ゆ、先、の、り、つ、糞、そ、

薰葭堂所藏賣茶翁茶具圖八品

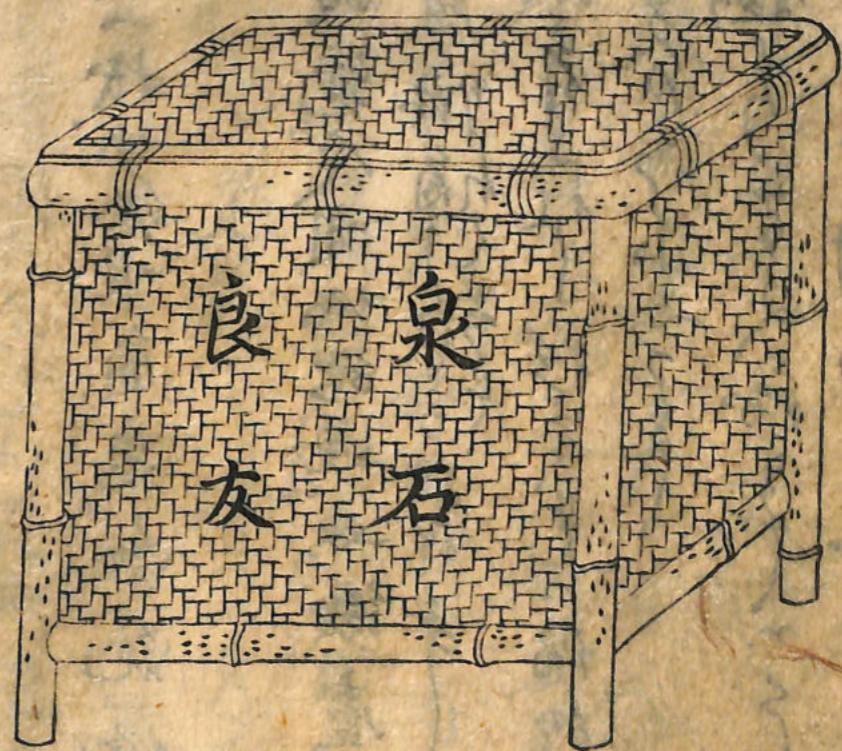
二十五

都籃

百拙題

高一尺二寸五分

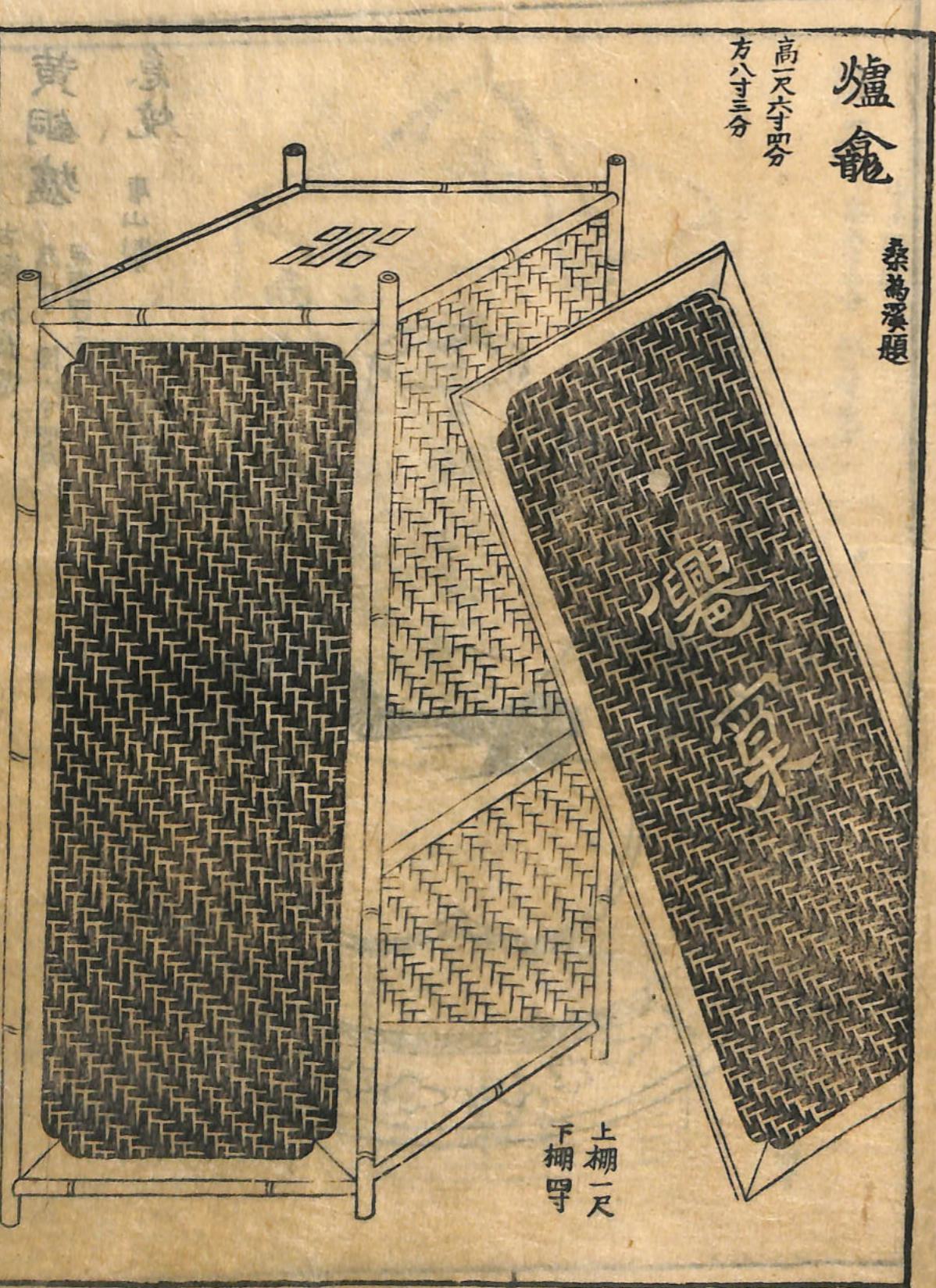
橫一尺



爐龕

桑萬春題

高一尺六寸四分
方八寸三分

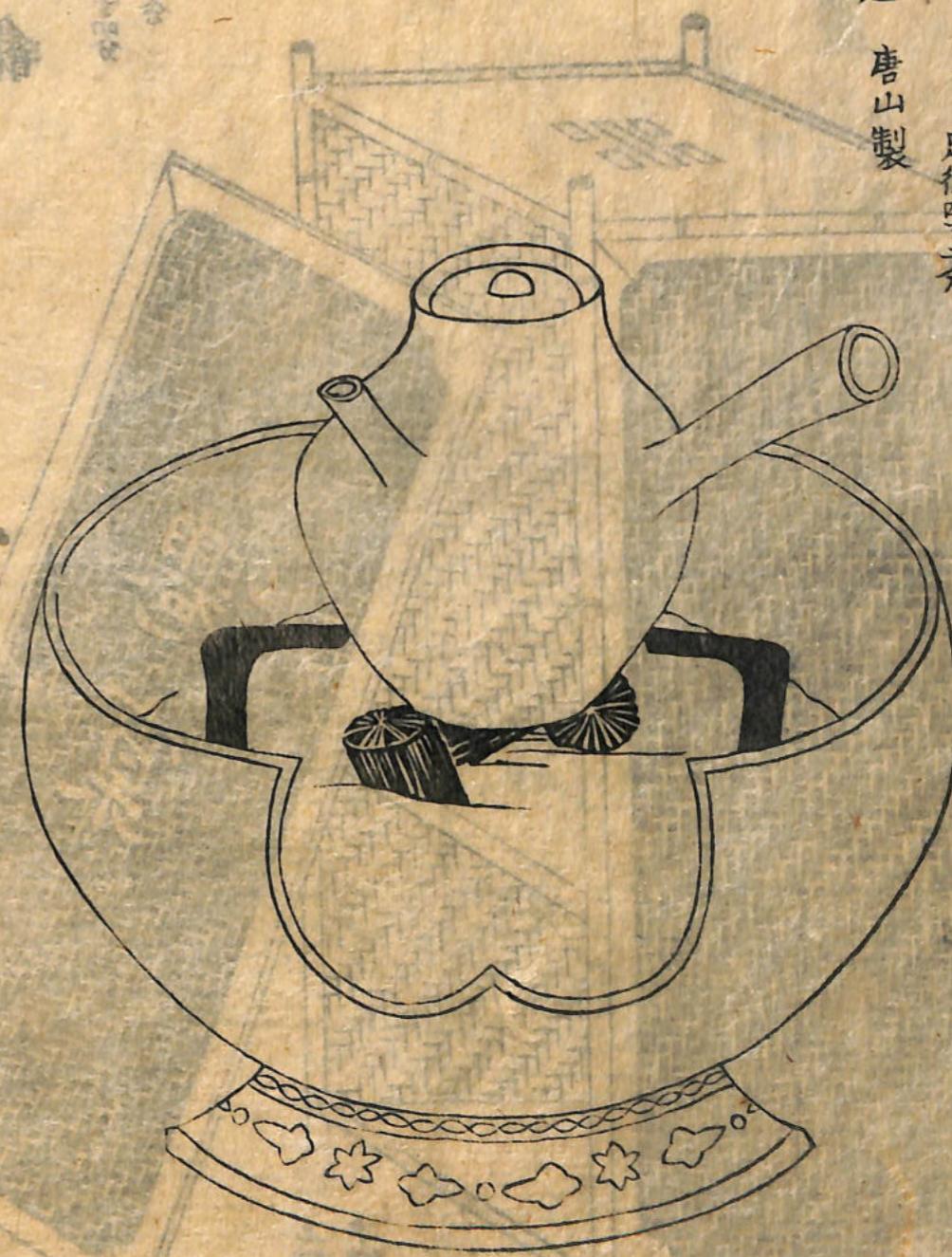


黃銅爐

古製加長造
高四寸 徑六寸四分
足徑四寸二分

急燒

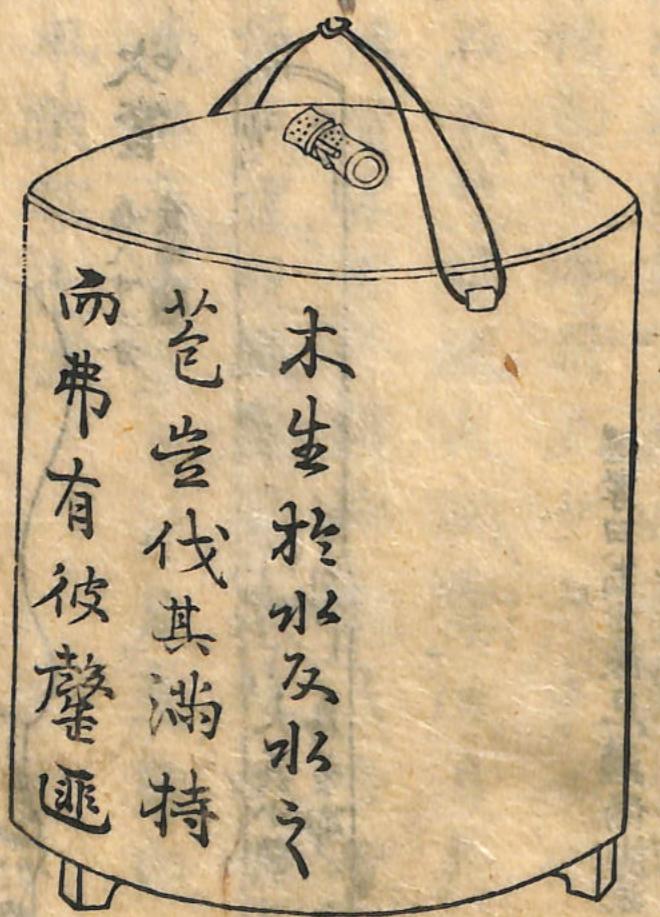
唐山製



建水

終南銘

高一寸五分半 徑四寸



注子

宇士新銘

高寸五分 徑六寸分

瓢杓 竹柄 長寺
芙蓉書



吹管 長八寸三分
蕉中題



思孝曰翁肖像見翁偶詭故不贅今幽茶具者其燒山之餘
筆摸造俱藏浪華木世肅之家云

自贊三首

此遠膳漢禮打風顛。罕歲入釋。革巾。參禪。百城烟水。
遠探要津。熟喝痛棒。掌。美矣。罕歷盡。靈霜。自放不了。
顛頽而皮。憮。憮。多少。老来安分。為。賣。茶。翁乞殊博飯。
樂在其中。廣通天。洞。鬻。渡。丹。花。差人。端。味。薦。以。蹉。過。
因。憶。昔。年。王。太。傅。流。無。文。古。少。知。音。

舉箇照靈。疎鬟峯髻。瘦杖枝。扶老鶴。鬢。蔽。客。吳。益。考。去。
獨步。沿。東。賣。茶。生。斗。笠。養。衰。躬。非。儒。非。釋。又。非。道。一。
箇。風。顛。膳。壳。翁。

箇。賣。茶。漢。盤。裡。維。何。典。底。椀。子。輩。縣。茶。瓶。為。糊。一。如。火。
賣。昇。諸。方。用。力。足。大。得。鍊。却。微。箇。擔。板。些。

夢幻生滅夢幻辰子知幻紀絕親疎食菜為乘猶無生
退亦一瓢還有餘多事乞願恬自寂坐心事境都
如空儕苟清體斯忘廓幽晦禮固太虛

偶游

豐之少半彈一流
動余景一草二

太傅西崇魏玄、十一年，蕭何舉來新晚祖無力全林
起漫叫黃華莫失真。

仰慕燒却誇仰慕先與一藍衣
不以嘗烹魚景也

我從來孤貧、垂地無難、仰慕有年、亦伴春山
林水、步礪於下竹陰、以故敏林盡缺保滿八十餘歲。今
已老邁、無力平用、心斗藏、身將終天年。却後寒燭
信之年、於此恐有遺恨。是以賞酒以火蔬三味、直下向
火燄裏轉身、去、轉身、一向且懶。何良久、劫火洞燃毫

未盡、青山遠、萬向雲中、便付雨丁。

乙亥九月初四

八十一歲高遊外

江村尊齋

附劉齋

專齋江村氏詳言具、倚松庵上号、豈以予之庵？
古者接絲桂、仰仰而放、其、祖宗舉、仰慕之石
乃殊、空而、舊城之役、亦乎、宗具、是、予、至、新
立都、以、少、微小、但、又既立、也、如歌連平、之、
乃、仰慕、之、伎、也、也、空、具、也、空、業、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
森、森、以、度、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

淮水尾、望、烟、烟、望、也、也、也、也、也、也、也、也、

奏すく平生の聲の響ひとおほし。食味實り
せ、食欲と爲ふ事無く。亦此、其處を聞く者、少りも
かう。然りて、帝大へは御、思ひて、邊枝根絆、
第酒すよとらへ下し御、也。（一）海に瀕す
その年、九月被庭の事のほか、ね草収益が
多く、奇美のものありとて、まほや、なまく又軍馬
算充る元日、小口号の詩寄りう。

り、水をも飲む事無く、あはれむ、うらぎ多ひ
て、つるぎ、かく、ゆき、まく、ゆき、かみつたとあくもん
難堪、いつか、わざうよ者かうなり。

○空氣のよき、城、まく、不全なる又剣齋。号へ、那
波道園、まく、おまく、もと、産の文筆、どうり

故、かく、高、托、せとゆ、あはれむ、教煙ま、そ
れ、紀薦、ちり聘、ゆ、い、と、は、ど、さと、の義と、
せり、ほ、も、度、安、四年、近、浦、縣、詔と、ゆ、あくと、
禁、け、れ、る、様、そ、く、か、く、く、う、て、（二）廢、蘇、と、下、し、御、先、平
紀、痛、の、義、と、か、く、く、う、て、廢、蘇、と、下、し、御、先、平
て、あ、く、も、う、く、き、た、う、き、た、う、

北村寫

考所、小村氏、津可昌、字仲平、名通名、本主江野
湖郡、山村の庄地、主、津可、信仁齋、えさうづくと、京師
に住り、嘗て、江中、小舟、と、まこと、向、せた、る、つ、と、あ、ら
あ、つ、民、代、御、うんづ、因、勅、うー、ひ、ま、と、そ、ま、の、代、業、を、

余りに之は儒服儒巾以制アリシテ、端正、素心にて
石一丈、止ニ付シテ、是と云々。院中小書と傳と疾
術視トドケ、所不レハ、漢士の名目トサ小称ナリ、自承爾
書様の詩、其黨の人被子綠より傳シルトナリ。是
モ生平、ごんぞ多矣故ナリ。

少小海經史、性氣聰韻章、宥儒時、游々、
此是支、行廿年所畏敬、此日惜脫亡、
沒生何寂美、聖學將榛荒、長安歲、一戶、
亡人、大商量、所好與世乖、為愚又為杞、
遭遇子古少、無悔特何傷、幸世升斗驚、

從意、自獨祥、請託絕權勢、軒謁坐羽室、
丹花燭、秋去吹噭、習乃常、又無能病、患
毛古、行坐法眼精而誦讀、五力彌潤圓、
車馬不須駕、冠蓋何假張、生埋又略、
不用求宦、寒暑給來、萬朝瞬有糟糠、
回首、丁巳裏比屋、僵、老不見衰廢、
未嘗有殷周、悲貧兒女、愁、入玄文、支曉、
梅蘂歎、雪文、柳條、春光、一案此家畫、
休爲迎鞠湯、

西生永済

准源序生那中ひりの准生永済へあせとゆす
又の波う葉衣い子へは人ちまひははまも、麻
せんと娘し、莊内福御山やいづあはせり、壬女
やく浦生和田のひまぬる色あれうあら
さうも起て波御く我れど、うかくは和田、永
済と被ねきとも、けぐくは清野牛原下
ままで、ゆきとへゆみ小用長きの後、是までのゆき是のゆき
いは神さうつてこくふれと侍てあひてふ國、群
かわゆく、くわくじよせし秋中、ゆきやうるを
もよみくまく、群よもよてほどうり、りむどうか浦の
ままで、村まやはの著せう和漢源流集の



物より奇へ自足し、詩も水滸の淫威用ひよしかれ
一ひゆるり、ふれ小差へ歎く、清涼元和の事
國すとぞわざやからむとぞうむれ我中ひつまの様と
よどとわらひあつて、そへ人の手をもどもばれ身をもま
の葉をわびゆき、日せん人富田氏の邊しめんとおゆ生
と経代ゆきり、まよがめがまのゆくもあやえひ
ちときとあるるふじふ海もひ時代ゆゆべくもかどく
のへがゆよも候、すと彼の源某のぬゆ麻とすとまを
もよく、ふじのねぬよもうんとねぐとよと
ゆく、且源様のまくわざれがまに地は、浦まくと代歌人今
瓦師、主に、又、國歌のるれ流のまくわざれがま
の烟簇み、け強士わうきをゆでそば。



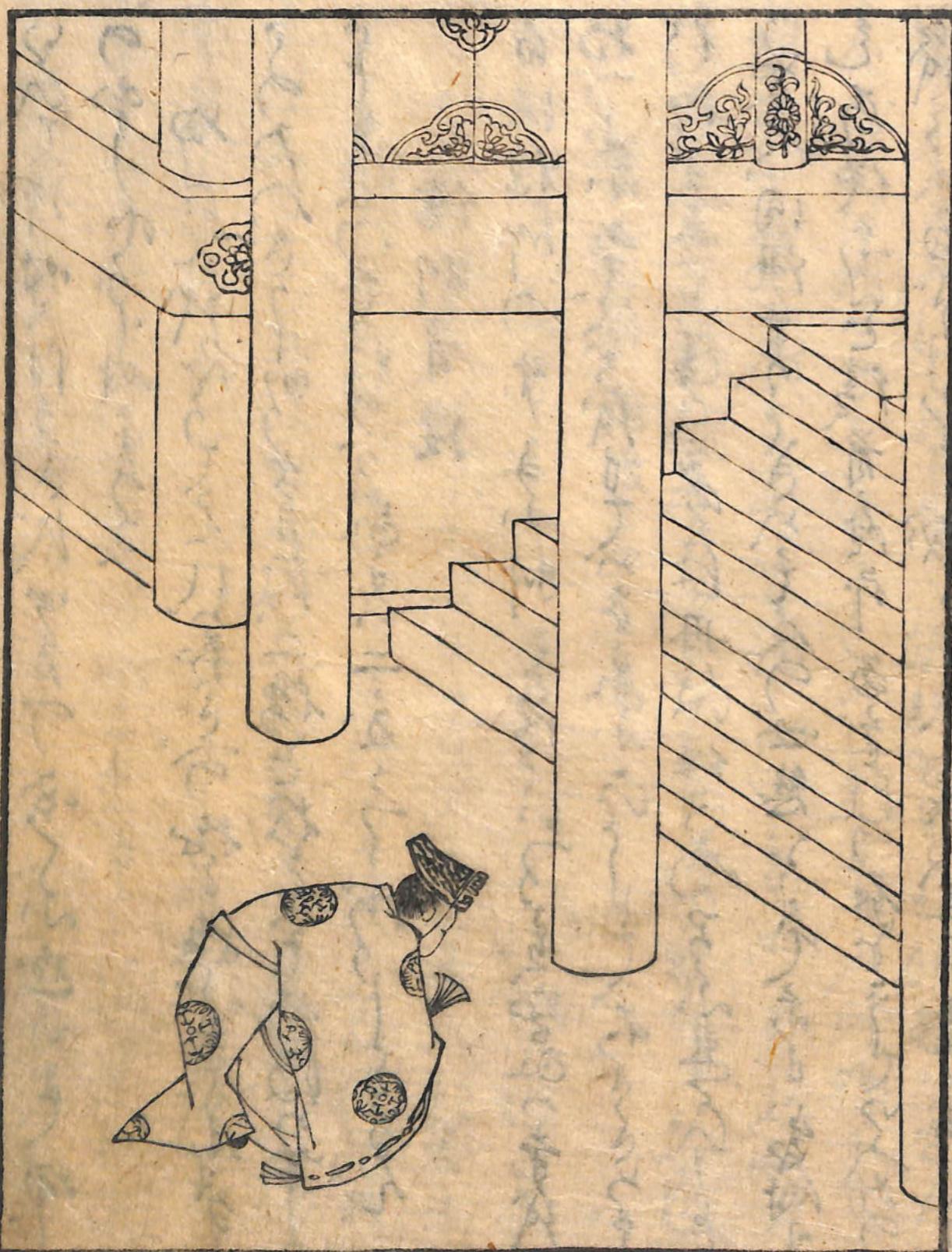
圓田防舟も、僕が酒井の仕職として、作まつて
ちひでやへし、其の力が蓄え、始めてよみがへ
とんじて、彼の如きは、わざとあらねば、むづか
りうへきる所に、心地がふくらみ、心がわら
きゆどく、第、もう奥魯へふたびりて、まことうへき
えうせや、そりふ来て、ゐるが、おもへざ
く、がいじて、心地とつもて、たゞ、いつか、おもへざ
そそじて、やうすらといふじが、おもへざ
はよ、そぞく木葉をうごめく、たとめかへうづ
き、あふさうすらおつとうして、きみじが、おもへざ
つゆさくさく、めじめじ、おもへざ
ほ

おはうさをうみのまつおり、おはうさをうみ
とば、やうでもそと、おのねぢく、すばに、ちぢよ
すに絶す、うごめくとすなまく、おのね脊の危者
し、よき医療と、おせきと、おはうさをうみ
おはうさをうみ、よむに御ねへりて、よまゆゑ
ようと、医療と、おはうさをうみ、よまゆゑ
よまゆゑ、うごめくと、おはうさをうみ、よまゆゑ
おはうさをうみ、よまゆゑ、おはうさをうみ、よまゆゑ
よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ
よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ、よまゆゑ

おもつ事、おとどきとて井戸へひの小窓
おはう金へり、かくまうほテキ金さうへ
あや、あらわしがたびくわうとくあへ
まんじゆけとせようましまくわだと、

青木と計紙

ち木と年と長度は地あひと清潔の役すり、
圓周傍をとひく、井戸底にてきる、ある時
のけふと小窓ちとと、井とて門と守られ
まうじり、今ハ井よせぐどさかあはずと、お引
ひひうほうと、ゆよあくとへすい、
橋河院ととひき、船ふ下とて石舟ひ、井代巻と漢
せん宸翰と御ひながとと首ふうけて、げくまうぢ



のうへて片時にはまくば、四方すらもふるむるも、寧
のうへてやうとねまく。

ゆふよひやうてんれいをうてせうほ、まくまく
よのたへきうめうそは二種とねく、まくほへ第
もとうへうてわうつあむに二えうづびとくえ、

傳別首座

白は龍所へせうふ別そくと、うほ、まくひま成
わづふさうば、ちがひてば在るふうとて、わくひどり
行脚よまくとまく、まくは母故せうづうふ出ぐ
や、へ向ゆすくとまく、首、世、年、あざれの衣をうでり、あ
毛うき使ふとまく、首、世、年、あざれの衣をうでり、あ
齋まよ、あくびるを識りと、農人翁と號と呼ぶ、

甲申小あうれと嘗るまく泥鍋とまく、泥鍋六重
と、嘗は鍋とととと、まくあうえりふ人の岸と
難處と嘗るまく、まくと嘗めいもく、竹を食ふ所、
多めえりうし、難處と嘗ると、も嘗取ゆと、也

傳圓空附後文

僧家えみ、夏は小升う鼻と、うふふくじ、終ふよ
まくあれ、東へまくうう、せこまく、まく、か、竜士
ゆよおれり、又加賀白山小山より、あら山松以下
木以うそく、夏は小山虎跡を、無邊の事と仰
きゆく、うう、うう、うう、うう、うう、うう、うう、
うう、うう、うう、うう、うう、うう、うう、うう、
うう、うう、うう、うう、うう、うう、うう、うう、



文義はれども、まことにかくへんが、絶一アのまふれが
そぞ神縁と刻じとゆめ。も、其處にすむ五音の
柱本成とてゆむ。二王より、トヨミとよひは、
トモ、よきよきの、のよきとあつ、よくとよくは、
まへるゝよきよき。まはくよきよき。まはくは、
まはくよきよき。まはくよきよき。廣今森屋の長塚
さんじやかね九郎と、さふ。一あきづらふ、屋敷の
へふうるうて、塙の外郭半とあるなむと丹生と、
わうゆう、ゆのえいとあるやうと、きふととくわくゆうと、
テヘリキ。じゆうと、う、けふあとと、圓室へとけ
ふのむちよあと、らやおとあと、圓室へとけ
かゆて、ひゆて、ひゆて、ひゆて、ひゆて、ひゆて、

いはりてひ難と御心を以ておもひやうて被絶
かくふ件の佛縁とおもひゆくまよ況じまほひう
あひき、ひきとおもひておもひておもひて止みけ
ましむるがむよりあひせじがめ夫のせよゆく佛の
道よかわふくじとおもひておもひておもひて
かくふくふくとおもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
○被絶の被絶は、へつぞくをせぬわましま
トヒ、是と華やといふや、蓮華輪端といふより、
も見ゆづれふ、諸くらべ、おもひおもひておもひて
びとおもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて

おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
日歌といふおもひておもひておもひておもひておもひて
又あらへうひとおもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて

中食忠宣附山中源士

中食忠宣が伊豫守の慶生で、承よ身とまつゆ
故うて花輪みがく曾太田忠輔がおと帰り、輪
輪はたえとく年、こゝの元もとよどりておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひて

所あつては、ひそかにうる實際がついて、應れどもあつた
宣教は、よきせざりと見て、其說あれどや、小ちくしきうち
の余は、此の事と、とて、まことに、春秋のじりもあつて、酒
壺も、酒器といふもの、度といふもの、いふもの、あつて、
きて、り、美酒ありど、ぶよきうと、をもつて、ひき、
夏冬の間と用事とよむと、あくと、よゆ、うだ、西東の
余の南は、猶矣さうす、あくからだらしく、おどり、ども、
けども、庄内年が、こと、わざわざで、食あつて、よしむべ、
ぐより、糧とあて、もと、いふかんじ、とて、一人ともと
おこらへば、はか事の、意するよき相手の、努力と、ゆきあつま
ゆきあつまつて、とまつて、人を、金を、取る
と、といふと、せんせんと、金を、取つて、おこつて、ひとを
離脱せよ

より大はくも、かへりてあつてあつてありてありて、まじめ
みのうと様にてる、とてててててててててててててててててて
持て無べてててててててててててててててててててててててて
持て持て、とててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててててて
ててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててて
てててててててててててててててて
ててててててててててててててて
てててててててててててててて
ててててててててててててて
てててててててててててて
ててててててててててて
てててててててててて
ててててててててて
てててててててて
ててててててて
てててててて
ててててて
てててて
ててて
てて
て
て

、年四十をりて、うなぎをすらばんに
あつといふ、おとづれの月夜のゆゑに、と頼す
おとづれ我様と一筆あづまし、花瓶の付せんと
びきびらわざく、ひづかに一枚あづまか
自筆と傳く、

わや小失宮のとてててててててててて
是處のとててててててててててててて
ちよひとてててててててててててて
とてててててててててててててて
てててててててててててててて
てててててててててててて
てててててててててて
ててててててて
ててててて
ててて
て
て

○應宣志摩より、ばくかく五年の間は、とくに、ま
さやまし、一奇人よもじり、人跡離れたる山林を遁び、
また光景が、いづれのものも見ゆず、かくして、ひ
あらうるる門の小もく精あり、めぐる、食ぬわとゆむ、
通路危うくと、峰の上の山小屋へ向づけ、せせらぎの音で、
我本より酒を含むて、お酒のあくの気がす
と打ひひき、あははははははははははははははは
悲鳴と涙とせめり、たゞかくらうのひとのだと、
いわつゝと、いわつゝと、も圍むはれて、
花顛ひておもえつかひにゆく。

晴人傳卷之二

